

回顧 田辺校地

(一)一九八〇年四月、難問をかかえながら国際高校の開校にこぎつけた頃、田辺校地はまだ自然のままだった。大学予定地は立木がまばらに生え、その奥は松を中心にした雑木林の丘陵が、あちらこちらに島のように散在していた。女子大用地には、平屋のセミナーハウスのような建物が一棟あり、管理人が住んでおられた。その他にはテニスコートが一面あるだけで、人の背丈もある雑草がしつかりと根を下していた。このあたりはマムシの生息地だというので、生徒たちに何回注意をよびかけたことだろう。わずかに国際高校の校舎と、予定の半分だけ完成した学寮だけが、学園の存在を示していた。一期生百四拾余名は広い校舎のどこに姿を消したのか、建物は森閑としていた。

(二)田辺校地の自然はそのままだった。六月ごろ管理棟の

廊下から大学用地を眺めると、ホトトギスの血をはくような悲痛な鳴き声が、丘陵を移動していく。王朝の歌人たちが夜を徹して、その初音を待ちこがれたのはこの声かと感じ入りながら耳をかたむけたのは、残念ながら私ひとりだった。まだ陸橋や通学路が整備されていない時期だったから、生徒たちはソメイヨシノの老木が立ち並ぶ近鉄興戸駅に降りたち、線路を横断して形ばかりの出口に向かい（地下通路になったのは一、二年あとのことである）。狭い家並みの間の道をたどり、片町線の踏切を越えて府道に出た。

あのあたりはオオイヌノフグリの、名に似合わぬ可憐な小さな紫の花に早春を感じ、初夏には蓮の花を左に見て通りすぎる。水場が近いからか、セグロセキレイがしきりに尾を上り下し、ケリが畑の上を集団で舞う。やがて校地への

仁井国雄

坂道にかかる。左側の竹藪からも、山頂の日光寺あたりからもコジュケイが「チョットコイ チョットコイ」とかんだかい声をひびかせる。帰国生には「ワン・ツー・スリー」と聞こえるという。中央分離帯のケヤキにはジョウビタキがとまって、上品な茶色の腹と白斑を見せてくれる。ウグイスはきまって右側の女子大の藪でさえずる。坂を右に折れて小道をダラダラと降りていくと、小さい溜池がある。池の中央に突き出た棒切れにカワセミがいるのを見た時は思わず息を飲んだ。まさに「生きた宝石」であった。生徒たちが正門から入れば、左右に並んだメタセコイヤの大木の間を通ることになる。この樹は国際高校創立者上野総長(当時)のたつての希望で植えられたものである。

(三)教育環境の整備と共に、自然は姿を変え始めている。ホトトギスの声もジョウビタキもカワセミの姿も消え失せ、コジュケイも絶滅かと思うと、ほんの二声三声鳴いてくれる。

すこしも変らぬのはウグイス、セグロセキレイとケリだけである。オオイヌノフグリも減った。しかし両大学のご努力で植樹が進み、とくに大学正門両側の植えこみがよく茂ってきた。もう二年になるだろうか、社会党の土井委員長(当時)が寄贈されたというソメイヨシノやシダレザクラが、女子大や国際中高の周辺に植えられ、育つかなと登校時に心配しながら眺めていたのが、細々と花をつけた。

多少は枯れたものもあるが、十年もすれば大きく育つだろう。十年というのは根拠がある。国際中学の校舎前の斜面に開校時十本ぐらい植えられたサクラが、開校後十三年目の現在は見事な花を見せてくれるからである。九三年八月中旬、女子大大学総務部長の御葬儀で田辺にいったら、通学路にオハグロトンボが一匹いた。久しぶりの対面だったが、田辺にはまだ自然が残っているという感を深くした。しかし誰の目にも明らかなのはマツノザイセンチュウによるマツの「赤変枯死」である。学寮の周辺がひどく、相当数のマツが切り倒され、自然の衰弱を身にしみて感ずる。切り倒すだけでなく、病虫害に強い木に植え代える必要があるのではないか。

(四)教育環境の整備の点から回顧してみたい。現在大学の工学部の建設が進んでいるから、完成時には校地の景観は大きく変わるだろうが、国際高校開校時の教育環境の整備の点で今も強烈に印象づけられているのは、学寮の安全確保の問題だった。開校の翌年に設置予定だった学寮は、生徒募集のため手分けして米州、東南アジア、ヨーロッパをまわった時、受験適齢期の子女を持つ海外在留の方々、特に母親の強い意見―寮のない学校なんて考えられない―により、計画をくり上げて開校に間にあわすこととなった。その結果として寮の本体は完成したが周辺の整備は手つかずで、いわば田辺校地に本体建物だけがポツンと置かれ出

入り自由の状態であつた。そのため寮のすぐ下の道路に不審な車を見かけることもあり、急いで洗面所とトイレの窓に防犯用の柵をとりつけ、警備員には深夜二回、寮の回りを巡視してもらつた。寮の敷地全部をフェンスで囲めたのは、かなり後のことである。

(四) 集団生活に必要な光・熱・水の中で、電気は問題なく確保できたし、水道も供給能力充分の時代であつた。しかし都市ガスの引き込みは大変だつた。一九八〇年開校の前年は第二次オイル・ショックで熱源に石油をあてゐることは問題があり、暖房は都市ガスによる温風暖房となつた。興戸地区の住宅はプロパンガスを使用していたため、都市ガスの幹線がなく、遠くからガスパイプを引いてきて、坂道の歩道の下を現在の大学正門前まで延長し、正門前三叉路の東南角にガス圧を下げたて利用に供するための変圧所が設けられている。

この工事には故安田博大阪ガス社長(当時)のご配慮があつた。学校は大量のゴミを出すので田辺町にゴミ収集コースを変更して戴いた。排水にも問題があつた。近くの普賢寺川は水田耕作に利用されているので水質汚濁は許されず、浄化槽は入念に、また大きめに設計された。しかし使用してみると流入量が浄化能力を越えそうになる。原因は寮生の入浴の仕方にあつた。彼等は浴室に入った時から出る時までシャワーのコックを全開にし、浴槽には入らずに

悠々と洗うのであつた。

教職員住宅の西側に緑地帯があつたが、グラウンド造成はこの場所しかなく、住宅の皆様に大変ご迷惑をおかけしたことは、今も申しわけなく思つている。

通学路の新設が両大学の一部田辺移転にともない実施された。通学路は田の真ん中を通り、片町線と府道をまたぐ陸橋が完成した。キャンパスへの進入路も上り下り各二車線であつたのが、上下各一車線とし、残りは幅広い歩道となつた。バス路線も開通し、さらにJR片町(学研都市)線に「同志社前」が新設され、大阪京橋方面からの通学が便利になつた。京都市地下鉄も一時間に二〜三本は新田辺まで乗り入れており喜ばれている。

教育環境は通学にやや時間がかかる以外は良好といふべきで空気が水ともに清く、自然が残り、騒音が少ないのがあるがたい。

(六) 立地条件からいえば、大学・女子大学・国際中高が大学正門を中心に寄りそう形になっており、国際高校卒業生が両大学で学べるのはありがたい。ただ女子大学の正門や国際中高のそれが、やや離れているのが惜しまれる。せめて大学正門前を南北に走る幹線道路が、現在の車止めの状態から脱して貫通が早められることを希望する。

(国際中学・高等学校嘱託講師)

まちづくりと大学

開校当時は枝も少なく、細かった木々も七年余りの間に大きく成長し、校地全体も徐々に緑につつまれ落ちついた感じになりつつある。

そして田辺校地の開校により、玉露と一休寺の町、京都と奈良の中間にある町から、同志社大学のある町、関西文化学術研究都市の町へと、田辺町のイメージも変わってきた。

昭和五十五年同志社国際高校が、六十一年同志社大学、同志社女子大学、同短期大学部が、さらに六十三年同志社国際中学校が開校し、約一万四千人の学生・生徒が通学している今日、これに伴って田辺町の姿も大きく変貌してきている。

大学の立地に伴って、何がどう変わってきたのか。どの

ようなことがこれからのまちづくりに求められて行くのかについて考えてみたい。

人口では、大学開校前は四万四千五百人余りであったが、大学周辺地域での学生マンションの建設や町北部地域での住宅開発等による増加もあって、本年八月一日では、住民登録人口四万九千三百十九人となり、推計人口（未登録者を含む）では、五万人を超え、来年工学部の全面移転がされれば、更に増加することが予想され、市制の施行が検討課題になってきている。

周辺地域の変化では、近鉄興戸駅舎の改築、JR同志社前駅の開設、駅から大学までの通学路の新設、新田辺―同志社―三山木間のバス路線の新設等の基盤整備がすすめられ、住民の交通の利便が向上したのをはじめ、大学や駅周

加藤 晴 男

辺、府道沿いなどで学生マンション・喫茶店・レストラン・食堂・居酒屋・衣料品店・靴店・宅急便などの生活関連施設、マージャン店・ゲームコーナーなどの娯楽施設の新設がされ、コンビニやBOOK&VIDEOショップなどの長時間営業店も建設され、学生だけでなく、周辺地域住民の利便の向上にもつながっている。またこれらの地元業者の商業収益の増加という効果を及ぼしていると考えられる。

しかし、一方では通学時間帯の幹線道路の交通渋滞、学生の自動車等の運転未熟による交通事故や危険の増加、通学路や学生マンション周辺での散乱ゴミの発生や深夜の騒音などの問題も発生している。街が形成されつつある段階での問題点でもあるだろうが、基盤整備の推進とともに、大学と行政がお互いに知恵を出し合って何らかの対策を講じて行かねばならない問題である。

☆ ☆ ☆

田辺町では「緑豊かで健康な文化田園都市」を都市像として、まちづくりをすすめているが、この中で屋根のある街を一つの柱としている。

公共施設では屋根付きを原則として整備をしてきているが、約一〇〇ヘクタールの緩やかに広がる丘陵地に建ち並

ぶ赤レンガと三角屋根の建物群は同志社らしい景観を作り出しており、大学周辺においても学生マンションや商業施設も三角屋根の建物が建設されるなど、同志社周辺における一つのイメージが形成されつつある。

また田辺町は、国道三〇七号以南が関西文化学術研究都市の区域とされ、同志社田辺校地は、その中の学術研究地区に指定されているが、文化都市づくりを旨すまちづくりにとって、地域と大学のかかわりを大切に、連携を深めることが重要な課題となっている。

町では、近鉄新田辺駅周辺を町の商業・業務核としての整備をすすめるとともに、三山木駅を同志社の玄関口として整備すべく事業に着手しており、商業核や交通アクセスの整備による学生や若者の居つく街づくりをすすめて行かねばならないと考えている。

また、現在「第二次総合計画」の策定をすすめる中で、学生たちとの懇談会を行ったが、商業や娯楽施設等の不足に対する不満と同時に、彼らが町内で利用や参加のできる施設やイベントの情報を探求していること、町について知りたいと思っていることなどを聞く中でハードと合わせたソフトとしての学生や若者がたむろし居つく街にむけた情報化の推進を図って行かねばならないと考えている。

一方、町にとって大学が持つ知能・教育力をどう地域に生かすのが重要になってきている。田辺校地でも公開講

演会や映画会、講座等が開設され、施設の一部も開放される中で、住民の参加や利用もすすんできている。また学生のクラブやサークルの町内での文化活動等への参加もみられるようになってきており、これらが充実されると、住民が大学に関心を持つ機会が増え、大学に対する理解を深めることになるだろう。

町でも各種の行政委員会や審議会等に先生方の参画をお願いし、施策の立案過程で効果的な意見をいただいたり、講座や講演会の講師として、文化・スポーツ・生涯学習の指導に当たっていただいているところである。

高齢化社会といわれ、国際化の時代といわれる今日、住民が心豊かで生きがいを持って人生を送るためには、とりわけ生涯学習の推進が求められている。

幸いにも今年度から、田辺町と同志社大学が協力して、町立中央図書館を会場に「たなべ・同志社ヒューマンカレッジ」が開講されることになり、定員百人に二十〜九十歳代まで三百五十余人の申し込みがあった。生涯学習への意欲の高まりと同時に、わが町にある同志社大学の講師陣という親近感が多く参加希望となったと考えられ、六、七月の二回の講座は全員出席に近い盛況であった。

まちづくりへの住民参加の重要性がいわれる今日、それは人づくりからと言い換えられるだろう。さまざまな生涯学習活動を通し文化や芸術の向上を目指し、或いは地域コ

ミュニテイの推進をはかる。その中から豊かで個性的な地域社会の形成、まちづくりがすすめられるのではないだろうか。

今日までの町と大学の協力に加えて、いま始まったばかりの「たなべ・同志社ヒューマンカレッジ」が一粒の麦として、田辺町に根付き、大きく成長し、多くの実を結ぶことを期待したい。

植えた木は五十年たつと自然の木であるといわれる。田辺町に植えられた同志社という木がしっかりと根をおろし、町のシンボルとして、そこに成る実を住民が享受できることが、大学のある町の意味ではないだろうか。

（昭和四十四年、大学商学部卒 田辺町管理部長